

《トピックス》

小学生のための市民大学「子ども大学よこはま」

内田ふみ子さん（「子ども大学よこはま」代表）

学校のカリキュラムにとらわれず、
子どもたちの視野を広げる

「子ども大学よこはま」が開校したのは、2015年6月。それから3年間、小学生の子どもたちに、大学教授や研究者や専門家が、学校のカリキュラムにとらわれない自由な講義を行い、子どもたちの視野を大きく広げようという試みを続けてきました。

「子ども大学よこはま」を設立された代表者は、日本子ども学会の理事でもある内田ふみ子さん。そして、



内田ふみ子さん

大学の学長は、日本子ども学会の小林登名誉理事長、副学長は日本子ども学会の榊原洋一理事長が務められています。

子ども大学というのは、もともと

とは2002年にドイツのチュービンゲン大学で始まり、ヨーロッパに広がったもの。2008年12月には、日本で初めて「子ども大学かわごえ」が誕生し、現在全国

で100校近くの子どもの大学が開校されています。NPOや自治体が運営の母体となったり、大学や団体、自治体等が実行委員会を組織したりと「地域の教育力」を結集した運営が行われています。

「子ども大学よこはま」は、「子ども大学かわごえ」と姉妹校の関係を結んでいて、運営方法などを参考にして、設立されました。「横浜市教育委員会」と「横浜市立大学」、「NPO子ども・宇宙・未来の会」の後援を受け、会場は横浜市立大学の教室やホールなどを無料で使用させてもらっています。学生の条件は、小学4年生から6年生であること。定員は100名です。1年間の授業料は4500円。運営を担当するスタッフは、地域で子どもの成長にかかわりたいという子育て中の方からシニアまで幅広い年齢層の方々と、現在ほぼ25名が協力しています。

10年後、20年後に楽しかったと、
振り返ってもらえるのが願い

授業は年5回、「はてな学」「生き方学」「よこはま学」のいずれかをカバーする内容が選ばれます。小学校の学習指導要領にも、理系文系にもこだわりません。代表の内田ふみさんは、最初はあまり興味のなかった

2017年度の授業

回	日程・会場	授業内容および講師
第1回	2017年6月10日 横浜市立大学金沢八景キャンパス・第1講堂	「脳と心」 榊原洋一（お茶の水女子大学名誉教授、CRN 所長、小児科医）
第2回	2017年7月23日 横浜市立大学金沢八景キャンパス・YCU スクエア Y204	「エジプトの考古学一星と考古学」 近藤二郎（早稲田大学文学部教授）
第3回	2017年9月2日 横浜市立大学金沢八景キャンパス・カメラホール	「地球のふしぎ 火山・地震」 小俣珠乃（国立研究開発法人海洋研究機構：JAMSTEC）
特別授業	2017年9月9日 横浜市立大学金沢八景キャンパス・ピオニーホール	「ロボットの未来を考えよう」 小林貴訓（埼玉大学理工学研究科准教授）
第4回	2017年11月18日 横浜市立大学金沢八景キャンパス・カメラホール	「子ども落語会～おはなしと落語」 立川晴の輔（落語家）
第5回	2018年2月24日 横浜市技能文化会館多目的ホール	「アフリカのストリートチルドレンの子どもたち」 清水貴夫（広島大学教育開発国際協力研究センター研究員）



第1回 講師の榎原洋一理事長と子どもたち



特別授業 ロボットと子どもたち

分野でも、授業を受けておもしろがってくれることに期待しています。「こんな世界もあるんだよと、子どもたちに違った世界を見せてあげたい。10年後、20年後に、子ども大学の授業を楽しかったと振り返ってもらうのが、私とスタッフの願いです」と話します。

安全のため保護者の付き添いを求めていますので、ほとんどの親が子どもと一緒に授業を参観します。

「子どもの視野を広げようと参加させることにしましたが、親の方が視野を広げてもらっています」

「子どもに話すぐらいのレベルが、私たちにもわかりやすく、ちょうどいい」。

その日の夕飯の食卓は、子ども大学の話題で盛り上がると思います。

自由なテーマと魅力的な講師

昨年末の第4回の授業は「落語」がテーマでした。講師は「立川志の輔」師匠の愛弟子の「立川晴の輔」師匠。出囃子はヘンデルのハレルヤ。「晴の輔」の名前の通り、明るく、わかりやすく、子どもたちに落語の魅力伝えていました。晴の輔師匠が子どもたちに強調したのが想像力。落語の本質として伝えようとしたのは、「何もないから、何でもある」豊かさです。

目に見えないものをなめている演技を見せた後に、

「晴の輔は、何をなめていたでしょうか？」という質問をして、子どもたちから次々と答えを出させます。「アメ玉」とか「キャラメル」とか、最初は常識的な答えでしたが、「何でもいいんだよ。何でも、想像の世界に制限はないからね」と促されると、「カナブン」「バイソンの角」「レゴブロック」「カエル」と飛躍していきます。

突拍子もない答えを思いついた子どもは、答えるのが待ち遠しく、「ハイ！ハイ！」と手を上げ、指名される順番を待っています。ユニークな答えにどっと会場がわくと、さらに子どもたちの頭の中はスパークしていきます。晴の輔師匠は、笑いのコツなどは何も話してませんが、人を笑わす楽しさの輪の中に子どもたちをあっという間に引きずり込みました。そして、寄席に行ったことのない子どもたちに生の落語を聞かせます。もちろん、会場は大盛り上がりです。

落語の世界は、学校の勉強の延長線上では、決して出会うことのできない世界です。そういう未知の世界と出会うと、子どもの目は輝き出します。さらに、講師の人格に触れることで、将来の生き方のきっかけを得ることもあります。

自由なテーマと魅力的な講師が「子ども大学よこはま」の魅力です。

(取材・文：木下真)



第4回 立川晴の輔師匠と子どもたち